レビュー

【書評】

シンジルト編
『目でみる牧畜世界——21世紀の地球で共生を探る』

東京，風響社，2022年
162頁，2,600円（＋税）

包　双月（ボウ　サラ）*

本書は表題の通り、文字よりも、民族誌写真を通じて、牧畜世界を読者に可視化する試みがなされたものである。読者は、合計376枚の写真を観賞することによって、21世紀の牧畜社会のリアリティを視覚的に理解することができる。地理的には、アフロ・ユーラシアと南米を含む広い牧畜世界を扱っており、近代化以降、変容しつつある世界の牧畜民の多様性と普遍性に関する民族誌となっている。

また本書は、人類学者と歴史学者からなる計12人の執筆者による３部構成で、総説と10章に加えて、フォトコラムを含む３つのコラムと資料編から構成されている。

まず、総説「世界の牧畜から牧畜世界へ——もう一つの共生を探って」（シンジルト）では、人類学と歴史学における牧畜／遊牧[1)]に関する国内外の代表的な研究をまとめ、その流れを俯瞰している。その上で、歴史学における遊牧民研究はより一層理論的に進んでおり、遊牧民の歴史的な功績を客観的に評価している一方、人類学における遊牧民研究はこうした学問的展開が未だ浅い段階にあることをわかりやすく説明している。さらに、人間は絶対的な主体とはなりえず、人間同士と、人間と家畜の相互作用から１つの「世界」を織りなすのが「牧畜世界」であると捉える本書の視座を提示する。つまり、人間を主体とし、自然と対立的に捉える近代西洋の「二元論」に基づく既存の人類学を超え、より広い文脈で牧畜世界を捉えるということである。さらに、牧畜世界における人間と非人間の共生のあり方から、現代人の学ぶべきものを引き出すという本書の狙いも示されている。総説の後に置かれたフォトコラム「牧畜民の多様な世界」は、ユーラシアからアフリカ、南米まで分布する牧畜民に関する12枚の民族誌写真からなり、牧畜世界の多様性を提示している。

続く第１部の「平原を駆ける」は、３つの章と１つのコラムからなる。第１章「ユーラシアの心臓部、天山の山嶺から——牧畜民の来し方、いま、そして行く末は」（秋山徹）では、11枚の写真が載せられている。本章では、天山山脈に暮らす牧畜民であるキルギズとカザフが紹介される。彼らは、清朝、ロシア帝国、ソ連およびその解体という激動の時代を経験し、現在は異なる国家に分断されている。そうした状況でも、牧畜が維持されている実態から、牧畜文明のレジリエンスを検討している。第２章「ウマを愛でる歴史——ソ連・ロシアの経験は牧畜をどう変えたのか」（井上岳彦）では、35枚の写真が掲載されている。著者はロシア帝国、ソ連、ロシア連邦という政権の転換を経験したカルムィク遊牧民を取り上げ、主要な家畜であるウマの軍事利用から食肉生産への転換、そして近年乗り物や食肉生産としての利用価値が低下したにもかかわらず、文化的価値が依然として高いという実態について考察した。第３章「牧畜民とオスマン朝、そして現代——牧畜の記憶はどう語り継がれ、扱われてきたのか」（岩本佳子）では、35枚の写真が用いられている。オスマン王朝の成立と崩壊、そしてトルコ共和国の成立と、正教分離を経験した遊牧民が、イスラームやオスマン朝を歴史的栄光や伝統として継承している実態を描いた。コラム１「インド・タール砂漠の暮らしと牧畜——移動民ジョーギーにとって牧畜とは何か」（中野歩美）では、18枚の写真が掲載されている。本コラムでは、インド北西部の砂漠に暮らすラクダ牧畜民であるジョーギーが伝統的なラクダ飼育に加えて、ウシ、ヤギ、ヒツジなどの新たな家畜を飼育するようになったこと、さらに定住化に伴い、降雨依存農業を取り入れて半農半牧的生活スタイルを形成しつつある実態について考察した。

第２部「極限に暮らす」は、３つの章と１つのコラムからなる。第４章「カザフスタン・小アラル海地域での牧畜——牧畜が災害復興に果たした役割とは何か」（地田徹朗）では、34枚の写真が載せられている。アラル海地域においては、社会主義的近代化以後の農業開発により、生態システムの崩壊と漁業の壊滅が起こった。そこで、この地の牧畜民がラクダ飼育をはじめた事例を通じて、限られた資源の適応更新循環のプロセス（p.65）を分析し、牧畜業が災害復興に果たす役割を明らかにしている。第５章「ヒマラヤでヤクと生きる——ブータンの高地牧畜民が往来する境界とは」（宮本万里）では、35枚の写真が使用されている。ヒマラヤに生きる牧畜民が、標高差に合わせて移牧生活を営みつつ、低地の農耕民村落と物資を交換している実態、および国境を越えて中国から安価な商品を入手し、生業と国家の異なる人びととの交流によって厳しい自然環境を生き抜く実態を明らかにした。第６章「山と町を往還する——グローバル化はアンデス牧畜をいかに変えたか」（佃麻美）では、38枚の写真が載せられている。標高4,800メートルのアンデスに暮らすアルパカとリャマを飼育する牧畜民を対象に、舗装道路が整備されたことにより、荷駄獣としての役割が高かったリャマの利用価値が低下し、飼育が減少している実態を取り上げた。一方で、市場経済の浸透に伴い、アルパカの毛や肉の販売が主な収入源になり、商業的価値が高まったことで、積極的に品種改良を行い、主に飼育される家畜へと転換した実態を分析した。そのことから、社会環境の変化に合わせて飼育家畜の種類と利用形態を変化させ、柔軟に適応していることを明らかにした。コラム２「モンゴルの乳しぼり——牧畜民と家畜の心は通うか」（上村明）は、19枚の写真を通じて、モンゴル遊牧民の乳搾りの実態を分析した。そこで、かけ声と搾乳の際の命名による交流によって生じる人間と動物の伴侶種的な関係を考察し、人間と家畜は部分的につながっていると指摘した。

第３部「遊牧を生きる」は４つの章からなる。第７章「トルコ遊牧民ユルックの現在——いかに、なぜ移動を続けるのか」（田村うらら）では、27枚の写真が載せられており、ユルック遊牧民を対象に、夏はテント（ヤイラ）で、冬は家屋（クシュラ）で、家畜と共に移動する生活、また冬は兼業として農業も行うようになった実態を描いた。筆者はユルック人が快適なクシュラよりも、テントでの暮らしに憧れや懐かしさが混じった「何やら特別な感情」（p.107）をもつという。これはマンションや固定家屋での暮らしがより快適と認識する「定住民」的考えの表れであり、簡易なテントでの暮らしに憧れる「遊牧民」の感情へのカルチャーショックだと言えよう。第８章「ナイル遊牧民のライフヒストリー——キバシウシツツキはどうやって青年をふたたび立ちあがらせたのか」（波佐間逸博）では、42枚の写真が載せられている。本章では、トゥルカナの遊牧民が敵を助ける事例が取り上げられている。遊牧民が敵と共に暮らす実態、あるいは敵から仲間へ、仲間から敵へと関係性を変化させることから、遊牧民間の境界線の揺らぎを論じた。第９章「エチオピア牧畜民の老いの儀礼と豊饒性——老人式はどのように行われるか」（田川玄）では、22枚の写真が載せられている。著者はアフリカの牧畜民ボナラ人の儀礼、「老人式」の具体的なプロセスを考察し、儀礼の実践レベルで変化が見られるものの、象徴的な意味と儀礼のもつ意義は変化していないことを明らかにした。第10章「オイラト、動植物、無生物——牧畜民的な「共生」とは」（シンジルト）では、34枚の写真が載せられている。オイラトモンゴル人が動植物や無生物と共生し、また他者との明確な境界を意識しながら、境界を無化することなしに、差異を認めつつも共存することを明らかにした。

最後の資料編「基本語彙解説／関係年表」では、本書の基本語彙の解説と、本書に登場する牧畜民に関する情報の関係年表からなり、本書を理解する上での基礎知識を提供している。

以上のように、本書は民族誌写真を通じて、抽象的な文化や習慣を具体化および可視化したと言えよう。本書の特徴は、歴史学者と人類学者による共同作業により、牧畜および牧畜民をより広い人文学の中に位置づけた点にある。また、網羅的に民族誌写真を用いることで、牧畜世界の現在をリアルに表現したこと、および静止画と動画映像を用いたことに新規性がある。箭内は、20世紀中葉に映像や写真は民族誌的検討の重要な手がかりになっていたものの、文字として記録された情報の緻密な分析が何よりも重視され、民族誌映画や映像人類学は周縁的な位置づけにあったと指摘した。だが、電子メディアは飛躍的な発展を遂げ、専門のデジカメでなくても、スマートフォンでも綺麗に写真が取れるようになった今日、写真やビデオ映像の撮影はきわめて容易で手軽なものになっており、編集や活用も簡単になっているため、これから民族誌写真を用いた出版物や映像人類学には新たな領域が切り開かれるだろうとも指摘した［箭内 2014：8］。こうした新しい形式に挑戦した本書を読む上で、評者にとって印象的であったのは以下の４点である。

まず、本書は執筆者に人類学者だけではなく、歴史学者も含む点で、より長いスパンで牧畜社会を捉えることができた。また、たくさんのカラー写真を載せ、さらにすべての写真には詳しい解説があり、文字では表現できない実像を描くことができたと高く評価できる。とりわけ、日本は風土的に牧畜／遊牧的な要素が少ないため、リアルな牧畜民およびその生活を読者に届けることができた。民族誌写真のみならず、QRコードを載せ、動画を利用した点はこれまでの書籍にはあまりなかった試みであり、今後の学術書と一般書籍の出版の新たな可能性を提示したことも創造的だと言えよう。

第２に、本書は、アフロ・ユーラシアから南米に至るまでの広範囲で牧畜民を扱い、自然環境の違いによる生き方の多様性を論じながら、家畜に依存／共存し

*東北大学　email: shuangyue.bao.b8@tohoku.ac.jp

ている牧畜生活の共通点を炙り出すことができた。近代化以後、牧畜（遊牧）民は定住化させられ、市場経済化の影響を受けて牧畜経営のあり方が大きく変容し、さらに牧畜民の生活様式も再編されてきた。こうした実態に関して、各牧畜社会を対象とし、その社会変容を明らかにする民族誌が膨大に蓄積されてきたが［湖中 2006；尾崎 2019］、地域を超えた世界の牧畜を扱った本は少なかった。こうした空白を埋めた点でも本書は意義が大きい。さらにこれまでの牧畜研究では、遊牧民の移動を一般化する試みがなされており、移動の制限が彼らの生活にいかなる影響を与えたかを解明してきた。しかし、牧畜（遊牧）民の移動は、彼らの生活全般のごく一部である上に、移動は一般化しにくく、水平／上下移動、定牧など多様であったこと［稲村 2007］を、先行文献のまとめと、各執筆者の調査地での牧畜経営の実態から明らかにした。つまり、牧畜（遊牧）民研究は移動にのみ力点を置くのではなく、近隣社会とのつながりに配慮した上で、より大きなスケールで扱う必要性があることを提示したのである。

第3に、本書は近代化に伴う国民国家の形成、すなわち国境という明確な境界線の創造や行政区分、地下資源開発による自然環境の破壊といった牧畜（遊牧）民の生きづらい時代において、地球上の牧畜民はいかに対応し、本来の牧畜生活で培った柔軟性を活かしたのかを描写することができた。第4章の地田論文の「漁業がダメなら牧畜で生きればよい」（p.62）からは牧畜民が自然／社会環境の変化に対応した柔軟性がうかがえる。これは評者の調査地の定住農耕モンゴル人の事例からも同様の主張ができる。つまり、遊牧の維持ができなくなれば、農耕を導入すればよい。そして、彼らは新たに導入した農業を牧畜と組み合わせた生き方を創出した。これは、厳しい自然環境を生き抜くために不可欠であった柔軟性、牧畜システム本来にある適応更新循環の知恵の働きでもあると言えよう。しかし、定住化しても、都市化しても、牧畜民の自己認識の根幹が牧畜／家畜に置かれている。もちろん、自己認識の根幹は直面する他者と置かれた自然／社会環境によって変わることは常にある。生業構成と生活様式の変化が精神世界に与えた影響を明らかにするのは今後の課題であろう。

第4に、近年、日本で大いに喧伝されている「多文化共生」のスローガンがあまりにも狭義での捉え方だと指摘したことである。つまり、多文化共生とは、人間のみを対象に他者との共生を論じたものであり、またそれによって日本の少子・高齢化による社会問題の解決を図ろうとする「緊急処方箋」でもある。これは、いわば内に向かう発展（インボーリュション）［ギアツ 2001］志向の解決策であり、比較的閉鎖的な農業社会の特徴から生まれた発想だと捉えることができる。対照的に、牧畜社会の仕組みは積極的に外部社会とのつながりを作り、そしてそれを維持しようとする点で農業社会と真逆の仕組みである。さらに牧畜社会における共生とは、人間同士のみならず、動植物、無生物自然界を含む広範囲で捉えるべきとした新たな視点も提供した。こうした点は、近年のマルチスピーシーズ人類学との接点を設けた上に、人間中心主義の批判にもつながる。

上記の点を含め、本書は人類学の最新理論を牧畜社会と照らし合わせ、牧畜研究の今後の方向性と可能性を提示したと評価できる。他方で民族誌写真によって牧畜社会を観賞できる点では創造性を有するが、民族誌的な記述の部分はやや薄いと評者には感じられた。しかしこれは、民族誌的記述と民族誌映像のバランスの問題でもあり、必ずしも本書の弱点とは言い難い。

グローバリゼーションと都市化の影響下にある今日、伝統と現代が並行することは不可能である。牧畜民はそれぞれの置かれた自然／社会環境に能動的に対応し、現代を生きながら、伝統を継承・維持し、新たに創造する主体である。定住化、農耕化、都市化により、牧畜民は「変化した」と簡潔に扱うことは表面的な理解であり、現代の牧畜民理解には至らない。それよりも、厳しい自然環境への適応生活で鍛えられた知恵を活かした柔軟性のある生き方から、現代人は学ぶところが多いだろう。牧畜民の変化を恐れることのない社会の仕組みと生業構造に隠れている柔軟性および能動性の抽出は、人類学者らの今後の課題であろう。

注

1）編者のシンジルトは、本書での分析用語として、牧畜（民）という語を使いながら、牧畜の一形態として遊牧、移牧、定牧などの用語も用いる。具体的には、執筆者に委ねたという（p. 5）。評者は本書の内容紹介において、執筆者と同様な用語を用いる。

参照文献

稲村哲也 2014『遊牧・移牧・定牧――モンゴル・チベット・ヒマラヤ・アンデスのフィールドから』ナカニシヤ出版.

尾崎孝宏 2019『現代モンゴルの牧畜戦略――体制変動と自然災害の比較民族誌』風響社.

ギアツ，クリフォード 2001『インボリューション――内に向かう発展』池本幸生訳 NTT出版.

湖中真哉 2006『牧畜二重経済の人類学――ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社.

箭内匡 2014「人類学から映像－人類学へ」村尾静二・箭内匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンスロポロジー）――人類学の新たな実践へ』せりか書房 pp. 7 -26.

竹村和朗著
『現代エジプトの沙漠開発――土地の所有と利用をめぐる民族誌』

東京，風響社，2019年
352頁，5,000円（＋税）

後藤　健志*

本書は、現代エジプトの沙漠開発の諸相を、従来の研究では十分な関心が向けられてこなかった「人々」の側から描き出した民族誌である。本書の舞台であるブハイラ県バドル郡は、ナイル・デルタに隣接し、かつては「沙漠」であったが、1952年に始まる開発計画を通じて郡へと昇格を遂げた背景をもつ。沙漠開発が国土の隅々に浸透し、国民的関心事となった現在、肥沃なナイル河谷・デルタと不毛な沙漠の2極からなる従来の国土観は大きく変容しつつある。著者は、バドル郡のような開発から比較的長い年月が経過した地域に注目し、国家主導の開発計画と人々による社会的紐帯の再創出との相互作用を捉えることが、同国における社会変化の一般像を提示することに繋がると措定する（p.39）。

まずは3部6章からなる本書の概要を紹介しよう。第一部は「歴史」が主題である。第一章「歴史の声」では、2003年にバドル市議会が地域史として刊行した冊子をもとに、開発計画の開始から同郡が成立するまでの過程が考察される。この過程では、開発計画の事業主体が農業公社へと再編され、やがて郡へと姿を変えた。これに伴い住民は公共サービスへのアクセスを拡大させた。同冊子の分析を通じて、著者は沙漠開発がエジプトの政治体制の構成に深く関わる実態を示唆する。

第二章「個人の声」では、著者が調査の拠点を置いたバドル郡の中心地マルカズ・バドル（バドル市）が舞台となる。本章では、著者が滞在したアパートの大家Gの生活史、その自宅兼貸家である建造物の利用方法、不動産経営の状況などが描写される。また市街地の複数のモスクに注目し、設立者たちの慈善活動やモスクのワクフ（宗教寄進財）登録をめぐる彼らと国家の関係性などが考察される。

第二部は「法」が主題である。第三章「沙漠地の法」では、20世紀以降の沙漠地をめぐる法制定が考察される。1948年に公布された現行の民法では「所有者のない非耕作地は、国の所有物とする」（p.158）と規定される一方、個人が占有した沙漠地が私有財となる可能性も示唆されている。しかし、1952年に成立した権威主義体制下では、民法で曖昧に触れられた無主の土地は「国有地」と明確に定義され、占有が禁止され、各行政機関による縦割りの管理体制が敷かれた。この枠組みは沙漠地の管理を定めた現行法「一九八一年法律第一四三号」にも踏襲された。

第四章「売買契約書」では、沙漠開発地を私有財として運用可能にする操作の実態が検討される。この手続きは「占有の追認」という形を取り、現在では郡庁所管の土地管理局となった農業公社を介し、「所有権の移転（タムリーク）」として実行される。このような具合に、売買契約をめぐる手続きの形式は、1970年代以降に各省庁の省令を通じて整備されていった。この事実は、農業公社などの中間団体と契約することで、個人が実質的に沙漠地を私有化できることを意味する。

第三部は「社会関係」が主題である。第五章「苗農場で働く」では、バドル郡の主要産業である農業に焦点が当てられる。2010年代のエジプト農業は、国家による統制・保護から自由経済の時代へ移行を遂げた。沙漠開発地の農業は、収益性の高い野菜や果物が主要品目とされ、バドル郡では優良品種の苗生産に特化した「苗農場（マシタル）」が発展した。マシタルは短期間で成果があがることから、若手世代の間で事業に乗りだす者が多い。本章では、湾岸出稼者を親族に持ち資金基盤に恵まれた農場経営者Zと労働者階級出身の農業技師Yの人物像が対比され、経済自由化後の農業経営、労働、消費生活が考察される。

第六章「喜びを分ちあう」では、結婚の「祝宴（ファラハ）」を介して形成される当事者と参加者の互酬性が社会関係の結節点として考察される。ファラハは莫大な出費を必要とし、開催者の資源を総動員することで実現する。一方、それは開催者にとっての果たすべき義務であると同時に、社会的威信を得る機会でもある。この点で、ファラハとは人々が社会関係を確認し実演する場である。

本書に関する調査は2011年にエジプト革命が発生した直後の状況下で実施された。旧体制の崩壊に伴い、著者は当初計画したナイル川上流域の大規模沙漠開発事業の調査を断念せざるをえなかった（p.48）。新たな調査地に選定されたバドル郡でも様々な行動規制が

*立命館大学